

忘れられない竹島先生の声

橋 孝司

自分が親しくさせていただいた方というのは、お顔だけではなくその声も忘れられないものですが、特に竹島先生の場合は、ギリシャ語を朗唱される時のあの声を忘れることができません。

二年生の時、ギリシャ語初級を受けたのが先生との最初の出会いでした。当時私が専攻していた西洋哲学はギリシャ語が必修でした。クラスは西洋哲学の学生が十名ほどだったと思います。先生は動詞活用を覚えさせるために繰り返し暗唱させる、と先輩から聞いていました。私たちの年からなぜか教科書を変更され、例となる動詞は（先輩の間で語り草の）「パイデウオー（教育する）」ではなく、「リュウオー（解く）」でしたが。私は西洋哲学の友人たちと面白がって先生の朗唱の調子まで真似ながら、繰り返していたのですが、おかげで今でも活用形が頭に残っているのだと思います。練習問題も暗唱させられました。忘れられない第一問は「ヘー・リュラー・タース・メリムナース・リュウエイ（琴は悩みを解く）」です。宿題として作った動詞活用表を細かくチェックしていただいたこと、古い木造校舎で寒さに手をこすりながら「アルゴナウタイ」を読んでいただいたこと、すべて懐かしい思い出です。ただ、心痛む思い出もあります。西条新キャンパスへの大学移転が進められていた頃、先生の研究室を訪ねると、引っ越しのため本が詰め込まれた無数の段ボール箱に囲まれて、心底疲れきったご様子でした。お人柄のいい先生は、きっと面倒な仕事をいろいろと引き受けられ、大変な重荷であったろうと思うのです。

私は今外国人に日本語を教えているのですが、上級クラスになっても単語や文を声に出して読ませることがよくあります。声に出す方がよく記憶に残ると思うからです。竹島先生から、御自身の実践を通じて有効性を教えていただいた方法です。分野は違いますが、私もそれを学生に伝えたいと思っています。